

## KOBEの海、父の思いで

**東** 京に出て20年になる。その前は神戸にいた。神戸で生まれて、神戸で育った。仕事でよく湘南に行く。本号でも逗子と腰越を取材した。たしかに湘南は素敵だ。ファミリーレストランのパートさんに、若奥様風の、スレンダーで脚の線のきれいな、薄化粧で品のある美人が多い事実が端的に、湘南の魅力が語っている。

魅力の主題は、地勢ではなく湘南の持つ物語り性だと思う。地勢なら、日本国内にもっと魅力的な海岸線がある。ぼくは湘南に行くたび思う。

けれど神戸もいざ。鎌倉や七里の海を見るたび、それらとはかなり違う。神戸のそれを思いたす。それはぼく個人の物語りに過ぎないのだけれども。

あれ？ なんか気障な書き出し？ すみません、お願いです。神戸の、海の思いでを語らせてください。ひとつだけ。

それは、生まれて初めての記憶でもある。60年代の初め。冬の神戸港。正確にいうと摩耶埠頭、そこで見上げた親父の背中だ。

親父は神戸の大きな製鉄所の高炉で働いていて、ときどき火傷を負った。朝早く、5時頃には出勤して、それを僕とお袋は省線（現在のJR山陽本線だ）を渡る橋まで見送った。妹は2つで、お袋の背負子のなか。

親父は夕方4時頃に帰ってきたが、それまでぼくは、なにをして過ごしていたよ。

「アセったといえはよ、生まれてすぐでまだ首も据わっていないおまえに、父ちゃん、ビールをちょこっと飲ませたところがあるんだよ、したらおまえ、真っ赤になっただよ、泡を吹いたんだよ。あわてておまえを取り上げた産婆さん呼んだら飛んできてな、こっぴどく叱られてな、その晩はおまえを、返してもらえなかったよ。」

……。

4つのぼくも、男同士の会話に込えようと思っただよ、たこえはこんなふうには話しかけるのだった。

かあちゃん作るいかげその天ぷらは、なんであんなにおいしいんだろうね。親父は心える。

「そいつはおれも同感だ。湯豆腐も捨てたもんじゃな。あとは、……あまり感心できないけどな。」  
そういう会話を重ねていると、浜国道にさしかかる。4車線で交通量が多く、親父はぼくを肩から降ろし、ぼくの手をぎゅっと握り、注意深く国道を渡る。そこからは親父の大きな背中を見上げながら歩く。

やがて重油の臭いがしてくる。倉庫街の港湾域に入ったのだ。生の牛皮を保管して、ひどい悪臭のする倉庫の横を小走りに駆け抜けると、そこが摩耶埠頭だ。日没直後で、海面はまだ、かすかに明るい。当時の神戸港にはまだ、水上生活者が沢山いた。ハシケと呼ばれる小型船で荷役や小回りの利かない大型船の牽引をし、船を寝食の場ともするのだ。

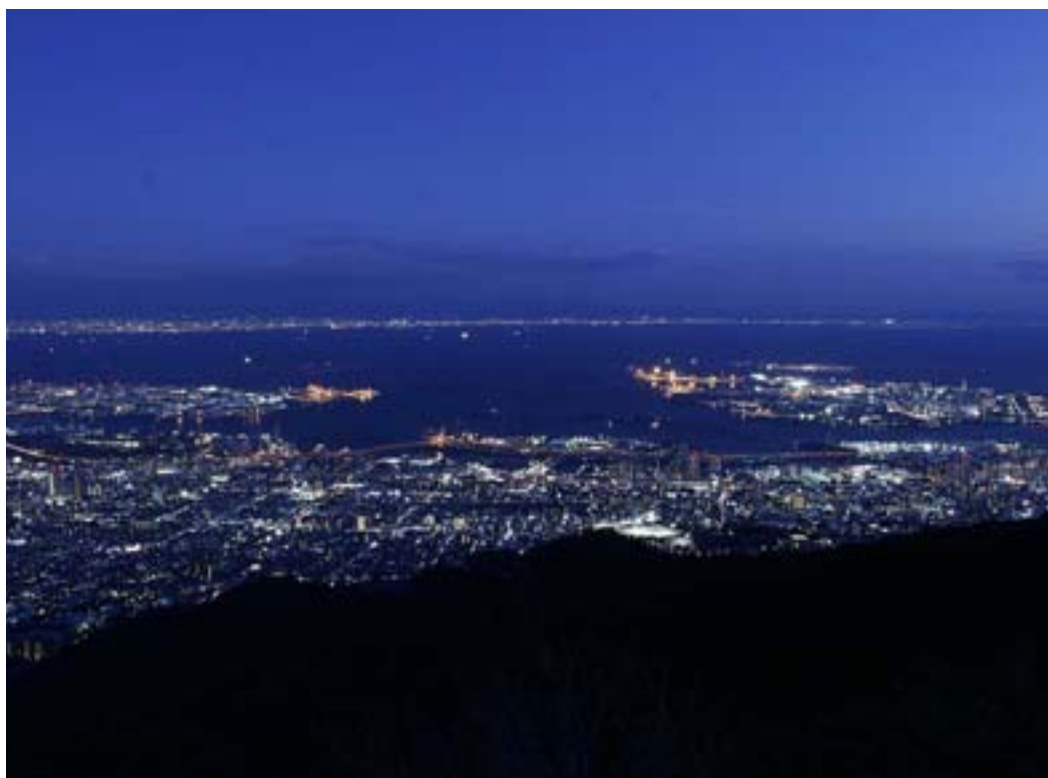
か覚えていない。

親父は、機嫌がいいと僕を散歩に誘い、決まって海へ、摩耶埠頭に行くのだった。親父はいつもぼくを肩に載せ、ぼくは4つで、落ちないように親父の髪をつかむのだけれど、禿げてはいなかったが髪が細くて、抜けるのではないかと心配だった。省線のトンネルを抜けると駄菓子屋があり、決まってカリントを買った。

ぼくの両手に余る紙袋いっぱい30円だった。親父はときどき肩のぼくからカリントを受け取り、まるで同僚にするような話しを、4つのぼくにすするのだった。

「ちんちんに毛が生えてそう経ってないころな、父ちゃん、隣の紡績工場の女工に惚れてな、これが細身の傳けなおれ好みの別嬪でな、埠頭でよく違い引きしたもんだよ。ギターを練習してな、曲を聴かせたこともあったよ。おまえ知ってるか、アイジョーシの唄だよ。ガラスのおおあつてな。」

……でもな、爺ちゃん、頑固たる、反対されてな、別れるってんだよ。



その狭くて不潔な甲板で煮炊きをしている親父を指さして、ぼくは親父に言ったことがある。

あいつのいいね。

親父はゲンコでぼくの頭をこちんと叩き、寂しそうな複雑な表情をした。安月給だった親父にとっては、ぼくの言葉がわかったふうに聞こえて、やりきれなかったのかも知れない。

違うんだよ親父、ぼくはあんなふうには、親父と、遊んでみたかったんだよ。あたりが暗くなると、親父は歩き疲れたぼくを抱き上げて、赤く錆びたアンカーに座らせた。

ふたりの会話は終わらなかつた。たいていはぼくが質問攻めにした。

4つ5つの男の子は、世の中が不思議でたまらず、親を質問攻めにするものだ。なぜネオンは点滅するのか？  
日本が昼のとき、アメリカも昼なのか？  
なぜ女の子は優しくして種やかなのか？  
いま思つと骨が折れたと思つ。親父は少しも厭つことなく教えてくれた。  
「いいころに気づいたね。」

爺ちゃんには逆らえないよ。そのカノジヨと泣く泣く別れてな、……心配すんな、おれはおまえには、そんな無理は言わなから……、でも参ったのは、日曜日、なんにもすることが無いんだよ。仕方ないから、埠頭から飛び込んでな、岩屋の浜まで泳いだことがあったよ、2キロくらいかな、そのころは神戸港も、いまほど汚れちゃいなかったんだよ。」

「それでさ、爺ちゃんに命令されてな、知り合いの田舎娘と見合いさせられてな、おまえの母ちゃんだけだな。おれが26、かあちゃんは22でな、鹿児島で結婚式を挙げてな、夜行の汽車でふたり、神戸に帰ったんだ、お互い照れて、なにも話せないんだよ、じつと下を向いたままでな、おまえ信じられるか？ 19時間会話なしだぞ。」

「水道筋の商店街に、ふたりで晩飯の材料を買いに行ったんだっけかな、その帰りにな、かあちゃんそわそわし始めたと思つたら、急にしゃがんでオシッコし始めたんだよ。田舎のクセが出たんだなあ、神戸だぜ、あんときゃアセったぜえ。」

といついつも言葉に続き、自分の持つ知識で、ぼくをミスリードしないよう慎重に答え、その答えに対する質問にも答え、ようやく納得した様子を見せると、その大きな手でぼくの頭をこしこしと撫で、

「またひとつ賢くなったね」と褒めてくれるのだった。  
（すみませんお父さん、ぼくはそう賢くありませんでした）  
すでに海は漆黒。

だがぼくは海の方ばかり見て、山を振り返らない。山を振り返るといつかは、帰途につくことなのだ。降りたくない。もっと、親父と、海にいたかった。  
どうしても思いたせない。  
親父はいつも決まった詰まらない冗談を言い、それが「そろそろ帰るか」という合図だった。  
ぼくは意を決して振り返る。  
降るような星空があった。  
六甲の麓の街の灯が、降って積もった星くずのように見えた。